

京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）表彰式



京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）の表彰式が3月3日（金）、京都大学国際科学イノベーション棟5階シンポジウムホールにて行われました。たちばな賞は、優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰することによって研究意欲を高め、我が国の学術研究の将来を担う優れた女性研究者を育成することを目的として創設され、今回で第9回目となります。

はじめに、伊藤 公雄男女共同参画推進本部支援室長の司会進行で、男女共同参画推進センター長の稲葉 カヨ理事・副学長より開会の挨拶がありました。

次に、山極 寿一総長よりたちばな賞 学生部門受賞者の中塚 祐子氏（工学研究科 博士課程3年）、研究者部門受賞者の池田 華子氏（医学部附属病院 准教授）へ表彰状と記念楯が授与され、株式会社ワコールの安原 弘展代表取締役社長より副賞の「ワコール賞」が授与され

ました。続いて、優秀女性研究者奨励賞 学生部門受賞者の久保田 結子氏（工学研究科 博士課程2年）、仲間 絢氏（人間・環境学研究科 博士後期課程3年）、研究者部門受賞者の中谷 加奈氏（農学研究科 助教）へ山極総長より表彰状が、安原社長より副賞が授与されました。研究者部門の受賞者クロイドン シルビア アタナソヴァ氏（白眉センター 特定助教）は欠席のため、受賞の紹介のみがありました。続いて、山極総長、安原社長が受賞者へ祝辞を述べました。

その後、たちばな賞受賞者の中塚氏、池田氏による研究発表が行われました。

最後に、川添 信介理事・副学長より閉会の挨拶があり、表彰式及び研究発表会は盛会のうちに終了しました。



たちばな賞 優秀女性研究者奨励賞 受賞者

たちばな賞（優秀女性研究者賞）

部 門	氏 名	所属・身分	研究テーマ
学生部門	中塚 祐子	工学研究科 博士課程 3 年	アモルファス酸化物の磁氣的、磁気光学的性質
研究者部門	池田 華子	医学部附属病院 准教授	難治性眼疾患に対する新規神経保護治療法の開発

優秀女性研究者奨励賞

部 門	氏 名	所属・身分	研究テーマ
学生部門	久保田 結子	工学研究科 博士課程 2 年	非線形波動粒子相互作用による放射線帯電子フラックスの急激な消失・生成過程の研究
学生部門	仲間 絢	人間・環境学研究科 博士後期課程 3 年	バンベルク大聖堂彫刻群と『雅歌』の花嫁神秘主義
研究者部門	クロイドン シルビア アタナソヴァ	白眉センター 特定助教	日本と東アジア域内外における人権の衝突と擁護をめぐる多元的理解と課題解決に向けた学際的研究
研究者部門	中谷 加奈	農学研究科 助教	土石流による具体的な被害状況の検討

平成 29 年度第 1 期研究・実験補助者雇用制度 利用者決定

平成 29 年度 1 期研究・実験補助者雇用制度の利用者は、17 名（女性 13 名、男性 4 名）の方に決まりました。

研究・実験補助者雇用制度とは出産・育児・介護等で、十分な研究・実験時間がとれない研究者に対し、研究又は実験業務（注：教育関係の業務は支援対象外）を

補助する者の雇用経費を負担するものです。募集は、年 2 回（6 月、12 月）です。本事業は、女性研究者に限らず、男性研究者も対象となります。また、研究分野の文系・理系は問いません。補助者未定でも申請できます。

伊藤 公雄支援室長 退任の挨拶

出身大学だった京都大学に「戻った」のは 2005 年。ちょうど、京大でも男女共同参画の動きが始まった時期だった。かなり若い頃から、男性性というジェンダーの視座から、性差別の問題やジェンダー平等政策を研究課題のひとつとしてきた私にも（幸いだったのか不幸だったのかわからないが）、いろいろ仕事が回ってきた。そもそも移動したその年に、男女共同参画企画推進委員会が設置された。すぐにメンバーとして、京大における男女共同参画の理念や基本方針などの策定にかかわることになった。

翌年、JST の「女性研究者支援」のプログラムの募集が開始された。申請段階からかわり、採択後は、女性研究者支援センターの推進委員として、主に広報などを担当した。その後は、男女共同参画推進室のメンバーとして、アクションプラン作りなどにも関与し、結局、在職中の 12 年の間、この課題とつきあうことになった。

大学におけるジェンダー平等問題は、今や国際的にも共通認識となっている（やがて、大学のランキングにもジェンダー項目が入るだろうと、かなり以前から書いたりしゃべったりしてきた）。とはいえ、日本の場合、まだまだ目に見えるような変化は生まれていないように見える。メルティング・ポイントに達することができれば、一気に流動化し始めるとは思うのだが、なかなか先が見えないのだ。

とりあえずは、できることを一歩ずつということだろうと思う。定年後に勤務している京都産業大学でもダイバーシティ推進室長を任命された。京都大学とも連携しつつ、大学の男女共同参画推進の加速を実現したいものだと思っている。



平成 28 年度 ワーキンググループ活動報告

広報・相談・社会連携事業 WG

主査 今村 博臣（生命科学研究科）

広報事業では、3月10日に Women and Wish フォーラム 3「男女共同参画に向けた研究者と大学のダイアログ」を女性教員懇話会との共催で行った。基調講演に続いて、総長との意見交流をおこない、京都大学の Window 構想における本センターが果たすべき役割を再確認した。

社会連携事業としては、関西の他大学との連携で第 11 回女子中高生のための関西科学塾を開催した。京都大学では、11月20日に実験講座を行った。また、12月23日には女子高生・車座フォーラム 2016 を学内に開催した。両イベントとも多数の高校生および保護者が参加し、次世代の女性研究者としての役割を担う世代に、早い段階から大学の教員や学生と交流する機会を提供することができた。

そして、センターの活動について、ウェブサイトやニュースレターを通して、学内外に広報活動を行った。ウェブサイトについては、大幅に刷新した。

育児・介護支援事業 WG

主査 小西 由紀子（理学研究科）

当ワーキンググループは京都大学構成員の育児と介護に関する支援活動を行っています。今年度は4月に男女共同参画推進センター内に待機乳児保育室を開室いたしました。ここでは京都大学の学生・研究者を対象として、認可保育所に入所できなかった生後 15 ヶ月までのお子さんをお預かりしています。当保育室の利用状況を見ますと、2017 年 2 月、3 月には利用者数は定員 18 名に達しており、依然として年度途中での保育所入所は厳しい状況であると感じます。また男性利用者の割合は約 3 分の 1 であり、男性研究者からのニーズも高いことがうかがえます。留学生や外国人研究者の利用者も増えています。

利用者の中には、月齢制限のために、お子さんの保育所が決まらないまま退室せざるをえない方も少なからずおられます。京都市の一時保育などはほぼ空きがないようですので、そのような方への支援対策は今後の課題です。

病児保育事業 WG

主査 足立 壮一（医学研究科）

京都大学男女共同参画推進センター・病児保育室「こもも」（以下、病児保育室）は、京都大学に在籍する全ての教職員・学生の子供（生後 6 ヶ月から小学校 3 年

生）を対象とし、急な疾病により保育園／幼稚園、小学校などに通うことの出来ない病中病後児の保育を行っています。事前登録制による運用で、登録者数はのべ 913 名、うち平成 28 年度の新規登録者 102 名と年々増加しています（平成 28 年 12 月末現在）。定員は 5 名（感染隔離室 1 名を含む）であり、平成 28 年度は 597 名の利用がありました（平成 28 年 12 月末現在）。利用状況は感染症の流行に大きく左右されており、定員を上回る利用希望のために断わらざるを得ない日もしばしばみられますが、利用者からは概ね良いご意見をいただいています。また、今年度も京大病院オープンホスピタルでのポスター掲示やホームページ等を通じての広報活動も継続して行いました。

保護者からの保育許可基準の引き下げを求める要望を受けて、京都大学医学部附属病院感染制御部の承諾を得て平成 28 年 4 月より利用基準（利用開始時間）を変更したところ、利用率は増加傾向にあります。また、予約時間や事前登録方法の見直しも行った結果、より利用しやすくなったという声をいただいています。感染対策上、困難な点もありますが、京都大学職員・学生が育児を行いつつ、仕事や学業を継続することの可能な環境を実現するため、今後も引き続きよりよい運営方法を検討する必要があると考えています。

就労支援事業 WG

主査 佐藤 亨（情報学研究科）

本 WG の主要活動である「研究・実験補助者雇用制度」については、育児や介護期にある研究者の研究継続支援という目的に即して、アンケートなどに示される利用者の声も考慮しながら、毎年、少しずつ改良を加えてきている。本年度中の実績は、第 1 期で応募者 27 名、利用者 18 名、第 2 期で応募者 31 名、利用者 19 名と、時期により変動はあるもののここ数年増加傾向にある。予算の制約のなかで、応募者が困難な状況にあることがわかりながら十分な支援ができないケースも増えてきている。また、ここ数回の傾向として、特任教員・研究員など比較的短い任期で京都大学に所属している研究者、特に外国人研究者からの応募が増加している。不安定な雇用、慣れない土地、家族からの援助も望めない、という状況のなかで育児や介護と研究の両立に苦慮されている男女研究者も多い。

雇用形態の変化や教員のダイバーシティ拡大に適応した制度とその運用の見直しも、制度全体の拡充とともに今後の課題である。

連載：研究者になる！－第60回－

研究者に「なった」！

教育学研究科・教授 桑原 知子

私はこの「研究者になる！」のコーナーが好きで、いつも楽しみに読ませていただいている。これまで書かれてきた方たちの多くは、「早くからこの道をめざしていて、夢がかなった」というより、「思いもかけず今の道に進むことになった」と書かれていて、また、「自分の力というより、他の人のおかげで今の自分がある」と振り返られているのが印象的だった。

ご多分に漏れず、私もまた、こんな人生をたどるとは、夢にも思っていなかった。そして、やはり、恩師（河合隼雄先生）との出会いが今の自分を作っているように思う。

現在私は「臨床心理学」を専門とし、カウンセリングや心理療法に携わる仕事をしているが、高校時代にはこんな領域があることすら知らなかった。高校では理系のクラスにいて、大学は理系を受験したのだが、見事に失敗。高校の恩師は、国語の成績だけが群を抜いてよかった私に「お前は国語の教師になるべく生まれてきたのだ」と言った。結局私は文系に方向転換し、国文学を専攻する大学生となった。

しかし、自分がなにをしたいのかわからず、また、授業にも興味をもつことができなかった。そんなある日、テレビで「自閉症」のドキュメンタリーを見て、「こんな世界があるのか」と衝撃を受けた。あくる日に図書館でこの言葉を調べて（40年余り前は自閉症などほとんどの人は知らなかった）、「臨床心理学」という言葉に出会うことになる。

私は、これを専門としているらしき大学の先生のとこに相談に行くことにした。今でもよく覚えているが、その先生の部屋の前でノックしようとして、私は逡巡し、いったんその場を離れた。しかし、帰り道の階段の踊り場に大きな鏡があり、そこで自分の姿を見た私は、踵を返し、思い切りよく扉をたたいたのである。

その先生は女性で、私が「臨床心理学の道にすすみたい」と言うと、「あなた、結婚したいでしょ？ 子どももほしいでしょ？ だったらやめなさい」と言われた。そんな恐ろしいものなのかとちらりと思ったが、さらに食い下がって相談した。そのときに、臨床心理学を学ぶには大学院まで行かなくてはいけないこと、また、京大では教育学部に行かなくてはいけないことを知っ

た。私は、再受験をして教育学部に入り、臨床心理学の道にすすむことになった。

入学するやいなや、私は意気揚々と自閉症サークルに入り、自閉症の子どもたちの療育に関わり始めた。しかし、うまくいかない。テレビでは45分で子どもが言葉話すようになっていたのに（45分の番組だった）、実際には一年やっても言葉を発しないのである。私は絶望し、自分がこの道には向いていなかったのだと思った。

河合隼雄先生の「臨床心理学」の講義も受けたのだが、そのすばらしさを当時は理解できなかった。もともと理系でトレーニングを受けてきた私は、「このような症状にはこのような治療を」というような明快な理論を期待していたのに、それを得られなかったのである。（医学とは違って、心の領域は、より「関係性」を含みこんだアプローチを必要とするため、異なった理論体系をもっている。当時はそのようなことを理解できなかった。）

その後も、実際心理療法に携わりつつも、ずっと疑問は消えなかった。プライベートでも、「結婚して子どもを育てて母になる」という人生を当然のこととして予想していたのに、まったく違う人生をたどることになる。

「教育分析」という、自分自身がカウンセリングを受けて自らのことを考えるトレーニングがあるが、それを私はスイスでおこない、その後何年もかけてやっと、今自分がなぜこの仕事についているのか、そして、このような生き方をしているのかについて、理解するようになってきた。この間、私をずっと支え、導いてくださったのは、河合隼雄先生である。

先日実家の押入れを片付けていたら、小学校のときの文集が出てきた。よくある「大きくなったら」のコーナーで、私は「大きくなったらおんなの学者になりたいです」と書いていた。「おんなの」とついているところに時代を感じる。

研究者に「なる！」と思って今の私があるのではない。いろいろ考えてはいてもそのとおриにはならず、しかし、たぶん人には行くべき道があって、多くの人に支えられながらその道を歩いていくのだろう。私は研究者に「なる！」のではなく、「なった！」のである。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>